

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成21年度:97～104.

立会い分娩を行った産婦と夫の分娩に対する満足感についての考察

林 智江、伊東明果、伊東美由紀、谷るみ子、森脇里美、
久保治美

「立会い分娩を行った産婦と夫の分娩に対する満足感についての考察」

周産母子センター（4階東病棟） ○林 智江、伊東 明果、伊東美由紀、谷 るみ子
森脇 里美、久保 治美

はじめに

分娩は産婦・家族にとって重要なライフイベントであり、分娩のスタイルも多様化している。A病院でも夫の立会い分娩を希望される妊婦は多い。夫立会い分娩の利点として、佐藤らは『夫立会い分娩が愛着形成促進に有効』¹⁾としており、立会い分娩は夫婦関係の構築のみではなく、父性の芽生えやその後の親子関係にも良い影響があると考えられる。そのため、分娩が家族にとって貴重な体験となるように、分娩期の夫に対しての精神的支援も重要であることが言われている。しかし青木らによって『施設分娩の場合、陣痛室・分娩室は慣れない環境のために主体的に行動することが困難である』²⁾ともされており、A病院においても、立会い分娩中の夫の立ち位置や、夫からの希望の表出の少なさから、助産師や医師に遠慮しているような印象があり、満足した立会い分娩ができているのか疑問に感じた。そこでA病院における立会い分娩の満足感を評価し、今後の助産ケアについて示唆したのでここに報告する。

I. 研究の目的

1. 立会い分娩における夫婦の思いや満足感を評価し、問題点やニーズを明らかにする。
2. 立会い分娩における助産師の役割について考え、助産ケアの向上を図る。

II. 研究方法

1. 研究期間

平成21年4月末～8月末

2. 研究対象

A病院において妊娠36週以降に経膈分娩で出産し、分娩後2時間まで夫が立会った夫婦10組。および病棟助産師19名。

3. データ収集方法および分析方法

研究に同意いただいた対象者に質問紙を分娩後2時間チェックの際に配布し、産後4日目の退院指導時に回収した。質問紙は先行研究を基に独自に作成した。質問内容は①初経産の別、②年齢、③分娩に対する感情、④パートナーに対する感情、⑤立会い分娩の満足感、⑥助

産師への希望についてである。①～⑤についてはリッカート法を用い、⑥は自由記載とした。さらに病棟助産師には立会い分娩時にどのようなことを心がけているか質問紙に自由記載してもらった。

4. 倫理的配慮

研究内容説明書・同意書・研究同意撤回書について説明した。質問紙は無記名とし回収、研究終了後シュレッターで破棄した。

III. 結果

1. 対象の属性

初産婦は4組、経産婦は6組。妻の年齢は20歳代3名、30歳代7名であり、夫は20歳代5名、30歳代5名であった。

A病院を分娩施設として選択した理由としては「他院からの紹介」が50%と最も多く、立会い分娩を希望した理由として、「夫がいたほうが心強い」が最も多く8名、次いで「出産は夫婦の共同作業である」と考えた3名であった。

2. 立会い分娩の満足感

立会い分娩について、夫婦ともに「とても満足」36%、「満足」64%という回答であり、夫の方が「とても満足」89%「満足」11%と夫の満足感が高かった。

3. 妻の感情

妻は分娩中「頑張ろう」「どうしてこんなに痛いのか」という思いが62.5%と高い結果がでた。(図1)

立会い分娩中の夫に対する思いは、「付き添ってくれてありがとう」「安心した」「辛いから一緒にいて欲しい」が85.7%であり、「共にお産を迎えられて嬉しい」という思いも同程度高かった。その他にも付き添った夫に対し肯定的な意見が多く、否定的意見については少なかった。(図2)

4. 夫の感情

立会い分娩中の夫の思いとしては、「子どもの顔が早くみたい」「貴重な体験をしている」「自分がしっかりとしないと申し訳ない」について過半数以上がとても思う・思うと答えていた。また、70%以上の夫は、分娩中落ち着かなかつたと回答している。(図3)

分娩中の妻への思いとして「元気なあかちゃんを産んでほしい」「頑張っていてほしい」「ご苦労様・ありがとう」「辛そう・かわいそう」が70%以上であり、「共にお産を迎えられて嬉しい」という思いも80%以上の夫が感じている事がわかった。(図4)

5. 助産師への希望

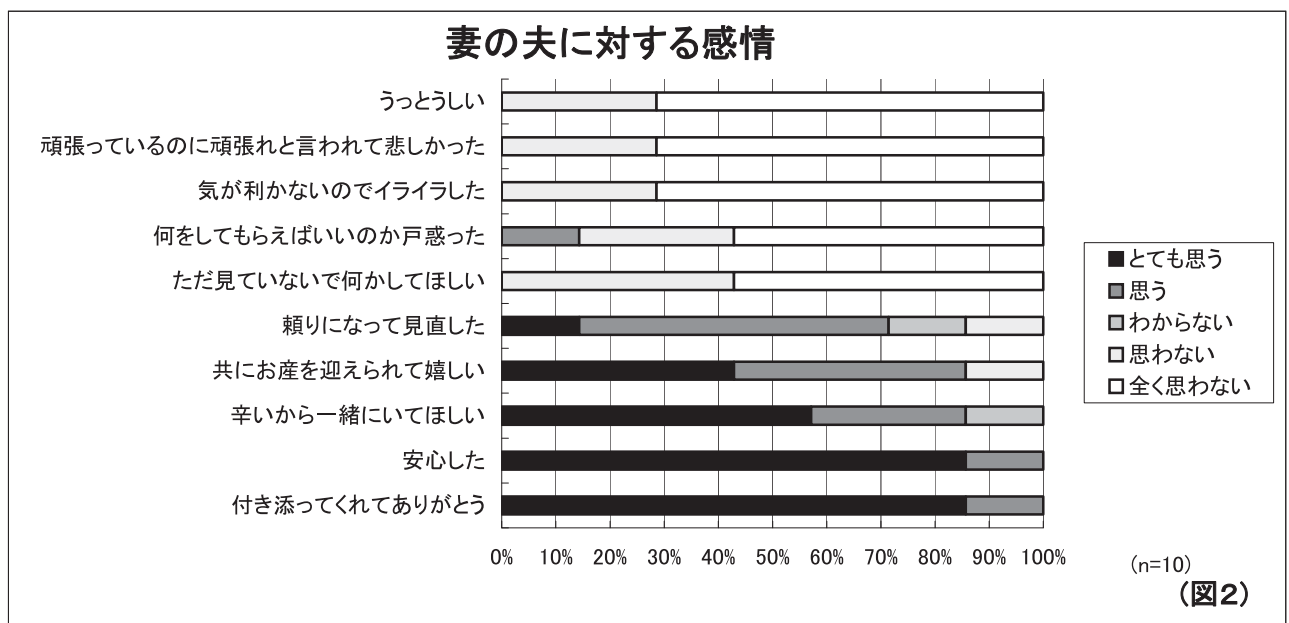
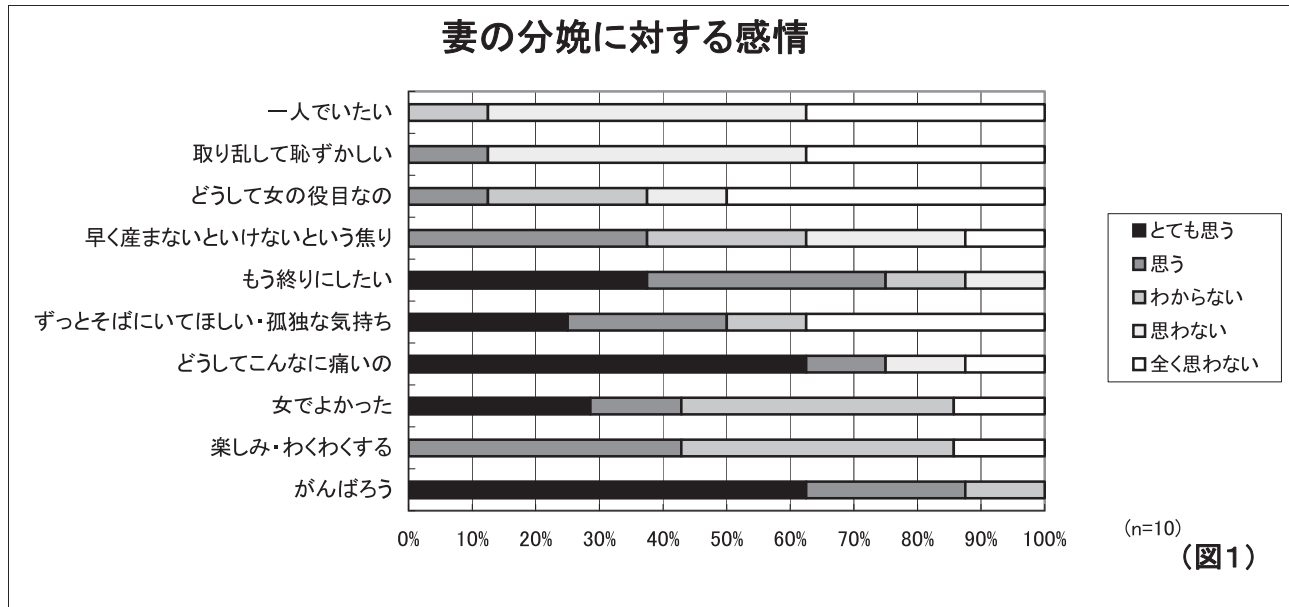
助産師に対しては「もっとその時々ができることをくわしく教えてほしい」「夫がいる場所を確保して欲しい」などの希望があり、「人が多く夫の出番がなく感じた」という意見もあった。

6. 助産師の立会い分娩への意識

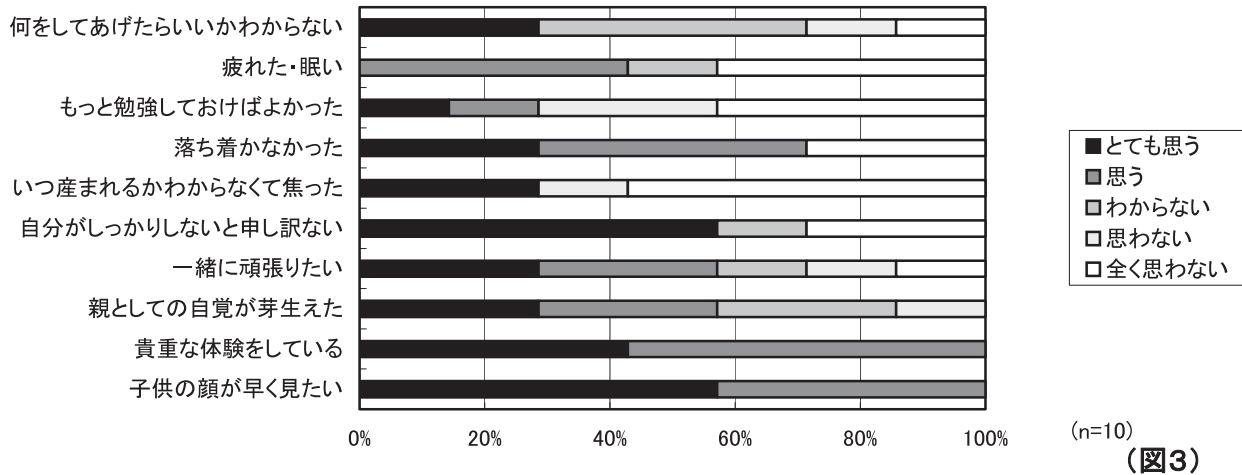
病棟スタッフ(助産師19名)に行なった質問では、「入院時に事前に記入されたバースプランに目を通しているか」には84%が「はい」と答え、「夫婦に再度バースプランの確認をしているか」には89%が「はい」と答えた。夫婦へのケアとして「夫が積極的にケアに関われるように促す」といった補助動作の促しと回答した助産師が約80%で、その他に呼吸の促し、励ますなど言葉がけと回答していた。

IV. 考察

今回の調査結果から、立会い分娩への満足度は夫婦共

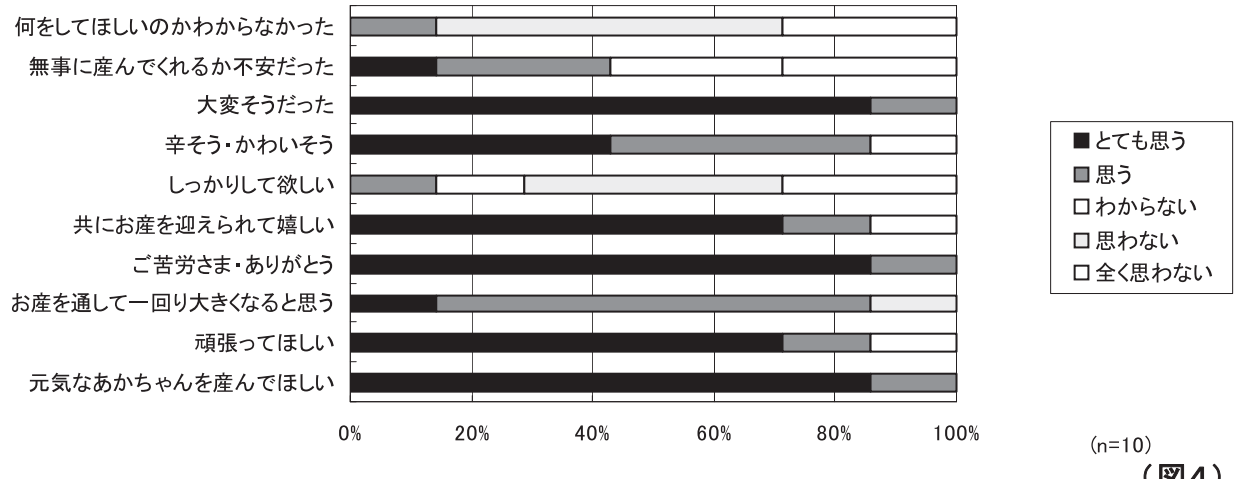


夫の分娩に対する感情



(図3)

夫の妻に対する感情



(図4)

全員が「満足」、「とても満足」と回答しており、立会い分娩が夫婦にとって貴重な体験になっていることが明らかになった。

分娩中の妻は「どうしてこんなにいたい」「もう終わりにしたい」と思いつつも「がんばろう」「楽しみ・わくわくする」といった分娩に対する前向きな感情を持っており、自己に対する否定的な感情は持ちにくいと言える。

我々助産師は立会い分娩に接する際、産婦および家族にとって有意義な体験になるよう夫にも一緒に分娩経過をその都度説明し、産痛緩和など身体的ケアにも参加していただくよう心がけてきた。

しかし、妻はそばにいる夫に対し直接的な関わりがなかった場合でも「ただ見ていないで何かしてほしい」「気がきかなくてイライラした」「うっとうしい」という感情はもちにくいことが分かった。我部山は『産婦にとって夫はそのまま心理的な中心人物であり、マイペースを保つために重要な存在である。したがって、産婦が夫と過ごしていることで居心地よく、心強く感じているのであれば、夫の役割としては十分である』⁹⁾としていることから、立会いをした夫はただそばにいて妻の支えになっており、妻は付き添っている夫に対しては身体的な関わりよりも精神的な関わりを求めている。このこ

とからも、一緒に児の誕生の瞬間に居合わせる事が妻にとっては重要なことであると言える。

立会い分娩中の夫は「自分がしっかりしないと申し訳ない」「一緒にがんばりたい」という苦しむ妻に寄り添う感情と、「貴重な体験をしている」といった非日常的な感覚も持ち合わせていることから、夫は妻と迎える児の誕生の瞬間に関わる積極的な意欲を持ち、立会い分娩に臨んでいるといえる。実際には「何をしたいかわからなかった」と戸惑う夫の感情もあるが、妻に対して「ご苦労さま・ありがとう」「大変そうだった」と労わる感情を強く持ち、「共にお産を乗り越えられて嬉しい」と立会い分娩に対して肯定的な受け止めをしていることが、高い満足感に影響していると考えられる。

また、「お産を通して一回り大きくなると思う」といった、お産を乗り越えた妻の頑張りを認める感情もあり、『立会い分娩を希望する父親が増えているということは、出産・育児は妻一人の問題ではなく、子どもの両親となる自分たち夫婦の問題であるという意識の表れと考えられる』⁹⁾と青木らが述べているように、一緒に乗り越えたことで夫婦の絆を感じているといえる。このことから、助産師は夫が妻への精神的サポートを行いやすい環境、雰囲気作りを心がける必要がある。

さらに分娩室という環境において、『夫は当事者ではないので産婦に比べて、分娩室の環境に圧倒されやすく、夫は自分の役割を見失いやすく、傍観者となってしまうことがある。』⁹⁾と我部山が述べているが、今回のアンケートにおいてもそのような意見があり、意思の表出に戸惑った夫婦もいた。

このことから、助産師は、先の見えない陣痛の痛みに耐える妻と、そばで付き添う夫が、自己コントロール感を持てるよう、夫婦の頑張りを認めつつ、寄り添い、傾聴するエモーショナルサポートに心がけなければならない。

助産師への調査では8割以上のスタッフは意識的にバースプランに目を通して分娩を担当しているが、大学病院ということもあり、緊急的な場合には事前のバースプランをすべて実行できないことも多い。しかし、その様な環境においても夫婦の満足感が高いことから考えると、夫婦にとって大切なのは、児の誕生の喜びを夫婦で分かち合うことであり、達成感を得ることができる環境であるといえる。

よって助産師は、夫婦でできたことや共に達成したこと、分娩時のお互いの思いを振り返る機会を設けていくことも重要である。それは、分娩時にケアに関われるよ

う配慮することだけではなく、分娩後に「お母さんはとても呼吸法がうまく出来ていましたよ」「お父さんは一番大きな声でお母さんを励ましていましたよ」など、夫婦の視点からでは見ることのできない姿を伝えることも含まれ、分娩を通してお互いを認め合うケアが達成感、満足感につながると考える。

v. 結論

1. 立会い分娩における妻は、付き添う夫に精神的ケアを望んでいる。
2. 立会い分娩における夫は、妻の支えとなり、妻と共にお産を乗り越えるという体験から、満足感を得ることができる
3. 立会い分娩における助産師の役割は、妻だけでなく夫へのエモーショナルサポートであり、夫婦の達成感・満足感を引き出すことである。

おわりに

今回の調査は症例数も少なく、夫婦のニーズを正確に把握できていない可能性は高く、A病院における立会い分娩の問題点の把握には至らなかった。よって今後もそれぞれの夫婦とともに分娩の振り返りを行いニーズの把握に努め、助産の質の向上をはかりたいと考える。

引用文献

- 1) 佐藤真由美・安達万理子・宮川葉子：陣痛室夫立会い分娩時の夫婦の感情 第36回日本看護学会論文集・母性看護 2005年 p5
- 2) 青木康子・加藤尚美・平澤美恵子：第3版 助産学大系5 母子の心理・社会学 日本看護協会出版会 2007年 p247
- 3) 我部山キヨ子：臨床助産師必携 生命と文化をふまえた支援 医学書院 2006年 p258
- 4) 青木康子・加藤尚美・平澤美恵子：第3版 助産学大系5 母子の心理・社会学 日本看護協会出版会 2007年 p212
- 5) 我部山キヨ子：臨床助産師必携 生命と文化をふまえた支援 医学書院 2006年 p256

参考文献

- 1) 中島通子・牛之濱久代：立会い分娩後の夫の意識に関する研究 母性衛生 2007年 第48巻1号 p82～88
- 2) 清水亜希子・下田真貴子・南裕希子(東京都立広尾

病院産婦人科病棟):夫が求める助産師の関わり—出産に付き添った夫のバースレビューから明らかになったニーズ— 第36回日本看護学会論文集・母性看護2005年 p6～8

3) 濱口由貴・宇田直美・竹林正美・船尾隆子・濱田佳代子(高知赤十字病院):立会い分娩をした夫への助産婦からの働きかけ 第32回日本看護学会論文集・母性看護2001年 p37～39

4) 半藤保・五十嵐祥子・新井繁・湯沢秀夫・吉谷徳夫・長谷川功:夫立会い分娩に対する分娩者側と医療者側の意識 新潟青陵大学紀要第5号 p49～55

5) 佐藤恵美子(香川県立中央病院):出産体験に対する褥婦の重要度・満足度に関する研究 第35回日本看護学会論文集・母性看護2004年 p24～26

立会い分娩を行った産婦と夫の 分娩に対する満足感についての考察

旭川医科大学病院周産母子センター4階東病棟
○林 智江 伊東明果
伊東美由紀 谷るみ子
森脇里美 久保治美

I. 研究目的

- 立会い分娩における夫婦の思いや満足感を評価し、問題点やニーズを明らかにする
- 立会い分娩における助産師の役割について考え、助産ケアの向上を図る

II. 研究方法 ①

1. 研究期間
・平成21年4月末～8月末
2. 研究対象
・妊娠36週以降の経膈分娩
・分娩後2時間まで夫が立ち会った夫婦
3. データ収集方法及び分析方法
・独自の質問用紙を配布
・分娩後2時間から産褥4日目までに回収した

II, 研究方法 ②

データ分析方法の続き

質問内容

- ①初経産の別
- ②年齢
- ③分娩に対する感情
- ④パートナーに対する感情
- ⑤立会い分娩の満足感
- ⑥助産師への希望

先行研究をもとに作成

- ①～⑤リッカート方式、⑥自由記載として集計

II. 研究方法 ③

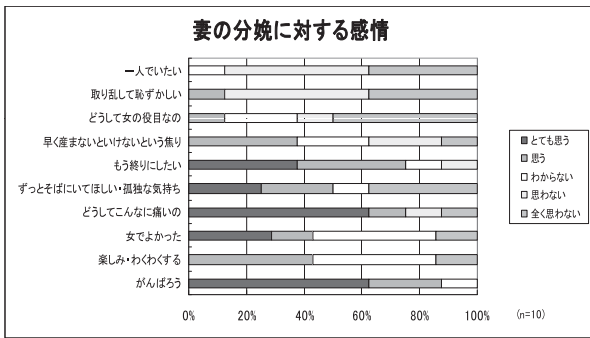
4. 倫理的配慮
研究内容説明書・同意書・研究同意撤回書について説明した
質問紙は無記名とし回収、研究終了後シュレッターで破棄した

III. 結果 ①

1. 対象の属性
初経産の別: 初産婦 4名、経産婦 6名
妻の年齢: 20歳代 3名、30歳代 7名
夫の年齢: 20歳代 5名、30歳代 5名
 - 分娩施設として選んだ理由
「他院からの紹介」... 50%
 - 立会い分娩を希望した理由
「夫がいたほうが心強い」... 80%
2. 立会い分娩の満足度
夫婦共に「とても満足」36%、「満足」64%であった

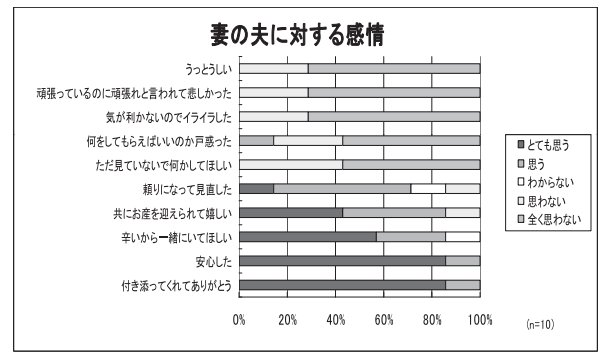
Ⅲ. 結果 ②

3. 妻の感情



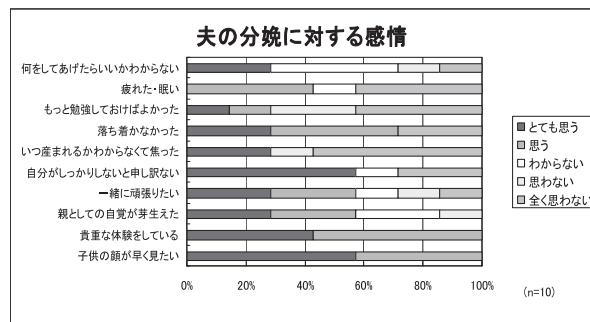
Ⅲ. 結果 ③

妻の感情の続き



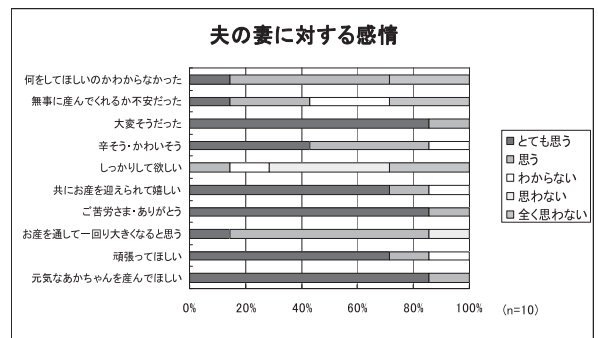
Ⅲ. 結果 ④

4. 夫の感情



Ⅲ. 結果 ⑤

夫の感情の続き



Ⅳ. 考察 ①

妻は

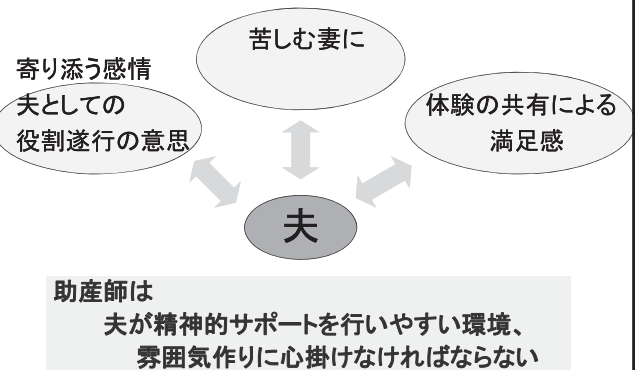
・「頑張ろう」「楽しみ」前向きな感情が強い
→分娩に対して主体的に臨んでいる

・「共にお産を迎えられて嬉しい」
→体験の共有に対する満足感



夫に対して、ただそばに居ること、安心感を 与えてくれることを望んでいる(精神的ケア)

Ⅳ. 考察 ②



IV. 考察③

満足感＝達成感



助産師はお産の振り返りを通して、
お互いを認め合うように働きかける

V. 結論

- 立会い分娩における妻は、付き添う夫に精神的ケアを臨んでいる
- 立会い分娩における夫は、妻の支えとなり、妻と共にお産を乗り越えるという体験から、満足感を得ることができる
- 立会い分娩における助産師の役割は、妻だけでなく、夫へのエモーショナルサポートであり、夫婦の達成感・満足感を引き出すことである

おわりに

- 今回は症例数が少なく、A病院における立会い分娩の問題点の把握には至らなかった
- 今後も立会い分娩を経験した夫婦と分娩の振り返りを行ない、ニーズを把握し、助産の質の向上に努めたい

ご清聴ありがとうございました